

平成23年 新春懇談会

年 頭 に あ た り

平成23年1月7日

礼文町長 小野 徹

明けましておめでとうございます。

輝かしい平成 23 年の新春をみなさんとともに迎えることができましたことを心からお慶び申し上げます。

また、本日は、新年早々の何かとお忙しい中、また、昨日からの大雪でお疲れのところ、新春懇談会にご出席を賜り、厚くお礼申し上げますとともに、日ごろから町政の推進にあたり大変温かいご理解とご協力をいただいておりますことにあらためて心から厚くお礼を申し上げます次第でございます。

さて、本日は、町の表彰条例に基づく「功労者表彰式」も行うことになっておりましたが、あいにく、表彰される皆様方がどうしても出席できないと云うことでございまして、大変申し訳なく存じますが、お手元に記載のとおり、7名の皆さんは永年にわたり、住民の福祉の向上と地域を災害や火災から守るため、常に情熱をもって郷土礼文町のために献身的にその職務にご尽力された皆様方、また、それを支えてこられた方々でございます。多大なご功績を賜りました功労者の皆様方に衷心より深甚なる敬意と感謝を申し上げ、今後とも、礼文町発展のため、変わらぬご支援ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます次第でございます。

さて、今年は「卯年」、干支は「辛卯（かのこのう、しんぼう）」と言いまして、元々は「草木が地面を覆う様子」を意

味する「茂（しげる）」に由来するとのことでございます。

昨年の干支「寅」は、春が来て草木が生えてくる状態を指すそうですが、翌年の「卯」年は、その草木があふれて地面を覆う。そんな繋がりがあるそうであります。

何と言いましても、卯年は、明るく元気な年でありたい。ウサギがジャンプするがごとく、大きな飛躍が期待されています。ただ「ウサギとカメ」のお話にあるように、カメを甘く見て昼寝をしたためにウサギが競争に負けたことから、油断して思わぬ失敗を招くなどの意味に使われていますので、今年は、油断なく、物事に取り組んでいくことに心がけたいものと考えているところであります。

昨年、日本人がノーベル化学賞の栄誉に輝きました。北大の鈴木章名誉教授と米パデュー大学の根岸英一教授のおふたりであります。お二人は「大きな櫛の木も小さなドングリから」という言葉を信じ、その言葉のどおりに新しい物質を作り出す「クロスカップリング反応」を発見され、偉大な功績を残されました。口癖は「重箱の隅をつつくような研究はするな!」「教科書に載るような研究をしよう!」という考えで後輩の指導にあたってこられたのであり、常に夢を追い続けてこられたそうであります。

そして、「ノーベル賞はゴールではない、若い人たちの励みになるよう、これからも頑張っていきたい」とコメントされていました。

また、宇宙探査機の「はやぶさ」は、大きなトラブルを抱えながらも7年以上のときを経て、宇宙から大変貴重な資料を持って無事地球に奇跡の帰還を果たしました。

これにより、太陽系誕生の謎が解き明かされると世界中から大きな期待が寄せられているのであります。

「果敢に挑戦するという灯火(ともしび)を消してはならない!」これが「はやぶさ」に関わっていた科学者の一致した考えであったとうかがいました。

私は、暗い世相が続いている中で、我が国が“ものづくり”の豊かさだけでなく、今、こうした地道な努力に培われた学術や芸術などの分野で、決してあきらめることなく、長い間、一生懸命、夢を追い求めてきた日本人の頭脳や技術が世界をリードし、活躍してこられた姿に大きな感動を覚えるのでございます。

そして、それは本町においても、教育に携わる人たちと礼文島の子供たちが保育所から小・中・高連携という本町独自の教育連携の中で「ふるさとを学ぶ礼文学」に一生懸命に取り組まれている姿と重なり、私は、その頑張りにとっても感銘しています。

春に行われた小中学校一斉の「全校クリーン作戦」、それに修学旅行での「礼文町観光大使」や「礼文島のコンブや高山植物の学習」など、自分たちが自慢できるふるさとづくりに取り組んでいただいたところでございます。

また、礼文高校生の作文コンクールで道内最高賞受賞や香深中学校卓球部の四年連続全道大会出場と野球部の二年続きの離島甲子園野球大会、また、船泊中学校では全道の「海の子作品展」絵画の部で3年連続の最優秀賞受賞、そして「全道下の句かるた大会」における礼文小チームの活躍、また、はちまる交流会では全校の子どもたちが素晴らしい頑張りを見せてくれました。

私は、こうした「子供たちの頑張り」からたくさんの元気をいただきましたし、これからの礼文島を背負っていかれる子どもたちを頼もしく感じております。

これもひとえに、教育関係者各位の熱心な取組の賜物であり、心から厚く御礼を申し上げる次第であり、礼文の将来を担う子供たちが「ふるさと礼文」を学びながら、町の将来や地球規模で物事を考えるという、この素晴らしい取組みが、これからも更に広がっていくことを期待しているところでございます。

さらにまた、この子供たちの頑張りに負けまいと、大人のみなさんも頑張り、宗谷管内市町村対抗野球大会では、礼文町チームが見事に優勝し、12年ぶりに優勝旗が島に渡りました。

私は、こうした町民みなさんの活躍に本当に嬉しい気持ちでいっぱいであります。どうぞ、これからも、みんなで礼文島を愛し、礼文島の素晴らしさを再認識・再発見していただきたいと思っています。

さて、我が国の経済は、景気後退局面がさらに長期化する懸念が広がっており、回復の気配がみられないままに新しい年を迎えました。

2008年のリーマンショックで落ち込んだわが国の景気も、昨年一旦は景気回復の局面に入ったといわれておりましたが、11月以降の急激な円高により輸出も期待できない状況となってしまいました。

特に、1ドル81円50銭で昨年取引を終えた円高は、世界的な景気回復を受けて欧米の主要な株式市場がリーマンショック前の水準にまで回復したのとは対照的に、アメリカの景気動向への懸念から一方的な円高の直撃を受けた日本株の出遅れが一段と鮮明になっております。

加えて、欧米の失業率は高止まりのまま推移していることから本格的な景気回復には今後もまだ時間がかかると言われており、また、わが国の輸出を支えてきた中国も物価高から金融引き締め政策に転じたため、今後どのように影響するのか極めて不透明な状況にありまして、わが国の景気が回復するには、まだ時間がかかると云わなければなりません。

こうした中で、菅政権は福祉・介護・環境分野で雇用拡大などの成長戦略を掲げ、国の一般会計予算は、マニフェストの実現や経済成長を促す「元気な日本復活特別枠」を設定するなど総額92兆4116億円と過去最大の予算規模となっています。

しかし、一方で、「コンクリートから人へ」に象徴される

ように、公共事業費は5.1%減の5兆4799億円と10年連続の減額なり、1978年(昭和53年)度当初と同じ水準にまで落ち込みました。北海道開発予算も11年連続の落ち込みで8.2%減の4459億円と33年ぶりに5000億円を下回り、公共事業費の割合を示す「北海道シェア」も8.9%となるなど、引き続き北海道の公共事業は大幅な削減となっております。離島の公共事業費も同様に大幅な減額となっており、今年も、わが町の地域振興に大きな影響がでるものと考えております。

本町の昨年の水産水揚げは、ホッケ、タラ等、主要魚種の漁獲量の落ち込みと価格の低迷などにより、2年連続で30億円を下回るという厳しい経済状況となっておりますが、今年度の国の補正予算による「地域活性化交付金」6198万円と4047万円ほど追加された地方交付税を地域の景気対策に活用したいと考え、年度内、できれば2月にも、補正予算を組んで、合わせて30数本、1億5000万円くらいの工事を発注したいと現在準備を進めているところでございます。また、本町の新年度予算においても、船泊保育所新築工事等、町民福祉の向上と地域の活性化に努めてまいりますので、ご理解を頂きたいと思っております。

一方、北海道においては、支庁再編条例が施行され、明治以来100年間続いてきた14支庁体制が九つの総合振興局と比較的規模の小さな五つの振興局に再編されました。

宗谷管内においても、昨年4月から従来の1市8町村の枠組みに新たに幌延町が加わり、「宗谷総合振興局」としてスタートしたところです。

さらにまた、地方分権を進めるため、住民に最も身近な行政体としての基盤強化が求められている中、合併新法による国の合併推進も昨年3月で期限切れとなって、平成の大合併は幕をひき、わが町も、単独での厳しい行政運営を行っていくこととなります。

そんな厳しさが予想される中で総務省は、原則人口5万人の中心市と周辺町村が圏域全体の暮らしに必要な機能を強化補完し、住民サービスを向上させるなど、具体的な分野の協定を結んで連携を強化する「定住自立圏構想」という新たな自治体間の連携策を打ち出しております。

昨年一年をかけ、宗谷管内では稚内市を「中心市」として、管内町村がそれぞれ機能強化や補完できる分野の協議をしてまいりました。

本町においても、稚内市との間で「生活機能の強化に係る政策分野」、「結びつきやネットワークの強化に係る政策分野」、「圏域マネジメント能力の強化に係る政策分野」という3つの分野14項目について、昨年12月の議会で、「定住自立圏の形成に関する協定締結」の議決をいただいたところでございます。

今年は、稚内市とさまざまな協議を通じて、具体的に共生ビジョンを策定し、わが町の活性化を図ってまいります。



私は、漁業の振興なくして本町の発展はないと考えており、今年も、漁業を支える漁場造成や漁港の整備をはじめ生産性の維持・向上を図るため将来を担う若手後継者を育成し、「離島漁業再生交付金」の活用や「養殖コンブの推進」、海に肥料を施す事業など、作り育てる栽培漁業を推進し、漁業の安定生産を図ってまいります。

また、近年の水揚げ量の減少を考えますと、どうすれば島のものにどれだけ多くの価値を加えて売り出すことができるのか、その価値を生み出す取組みが必要ではないかと思うのでございます。

それは、礼文で獲れた海の幸を島で加工し、販売流通するという水産物の生産だけでなく、これに加工、流通や販売と云ったトータルで水産に取り組む体制づくり、所謂「水産業の六次産業化」に取り組むことではないでしょうか？

例えば、雪や氷を使ったホッケの「雪氷一夜干し」、或いは「細胞を壊さずに生かしたまま凍結する新しい冷凍技術CASフリージング・チルド・システム」の活用によって、礼文島に「水産業の六次産業化」を進め、雇用の拡大と付加価値向上を図ることはできないものかと考えております。

一方、「観光」につきましても、前年比マイナス6%減の15万人前半と推計されており、8年連続で入込数が減少で、依然、礼文島観光も強い向かい風に直面しております。

しかし、こんな時こそピンチをチャンスに変える積極的な取組みが必要であります。

観光は、今、団体ツアー旅行から「体験型滞在型観光」に移行している最中でありますので、新たな観光資源をつくり出して観光の活性化を図るため「礼文島西海岸クルージング」の事業化に向けた取組をより強力に進めてまいります。

また、今年は、全町で光ケーブルが整備されブロードバンドが利用できるようになります。インターネットの向こうは全世界の人たちとつながっており、最北端の礼文島であっても、世界を相手にビジネスチャンスを広げることができるようになりますので、これを観光客の誘致等に活用していきたいと思っています。そして、「利尻礼文サロベツ国立公園」や「宗谷シーニックバイウェイ」など、北宗谷の地域をひとつの観光圏域にした新しい取組みや受入れ態勢の整備など、元気な島にしたいと地域で頑張る人たちを応援することを通して、質の高い観光の提供に努め、にぎわいと活気に満ちた礼文島を取り戻していきたいと考えております。観光は人と人とのつながりであり、礼文島をこよなく愛する「礼文島ファン」をたくさんつくるのが大切です。そのためには、私たちみんなが観光客のみなさんを温かく迎え、かゆい所に手が届くよう、お客様の目線を大切にした「おもてなしの気持ち」を持つことが大事なことでありますので、尚一層町民みなさんのご理解とご協力をお願い申し上げます。

最後に、もうひとつ大事なことがあります。

私たちはこの地球を、このふるさとを次の世代に引き継ぐ努力をしなければなりません。

国連の発表では、2008年における地球温暖化や大気汚染など、私たち人間が原因となっている地球の環境破壊が年間500兆円以上の損害を生んでいるそうであります。

昨今の気象は台風が異常な発達をみせ強風、高波にゲリラ豪雨や竜巻、雷など今まではあまりみられなかった大きな災害が発生しています。

また、年末年始にかけては岩手や島根それに鳥取などで過去に例のない積雪を記録しました。停電の中で新年を迎えたり、交通機関がマヒし列車や車の中で年を越すなどの異常気象が多く見受けられました。

「このまま環境対策を放置すると今後の世界経済に大きなリスクになる」と国連は警告しています。

特に、自然に恵まれた礼文島の環境はさまざまな生物によって成り立っており、その環境が一度壊れると、礼文島らしさはまたたく間に消えてしまうおそれがあります。

こうしたことから、私は、礼文島らしさを守っていく取組、所謂「生物多様性」の取組を進めたいと昨年12月に環境省の支援を受け「生物多様性地域戦略検討委員会」を立ち上げました。

人口1万人未満の町村では本町と黒松内町が初めての取り組みであり、この「生物多様性」とは「さまざまな生き物がつながりあって生きている状態」のことを指す言葉で

ございまして、自然がつくり出した多様な生き物の世界で私たち人間の暮らしが成り立っているのです。そして、この「生物多様性」という言葉が今年のキーワードになると思っています。

そうした世界から生命に欠かせない大気や水が生み出され、衣食住や医療にかかわるさまざまな原料や資源も提供してくれています。

また、礼文島の雄大な自然や希少な高山植物もこうした中で存在しているのであり、私たちは無意識のうちにこのような「生態系の恩恵」の中で生きているのでございます。しかし、この多様性が損なわれると社会の持続性や人間の生存に必要な基盤さえも揺らいでしまいます。

もちろん、「生物多様性」というのは、大変難しいことであり、小さな町村だけで解決のできる問題ではありませんが、「礼文島の海の生物多様性が増せば、漁業も自ずとその恵みを受けることになり、また、礼文島の貴重な高山植物等の多様性をきちんと保全することは礼文島の魅力が高まることに繋がり、結果として礼文島観光の魅力も高まることになる」のであります。

私は、生物多様性と地域の産業がどのように結びついていくのか？ 「生物多様性」には多くのテーマがあるけれども、自分たちにとって何がいいのかを考え、礼文島のためになるいいことをしよう！という考えをもって、「礼文島

らしさをなくさないために礼文島の希少な高山植物とお花畑を守っていく」ということに着目した取組みを進めてまいりたいと考えております。

礼文島の宝を守り、これからも元気な礼文づくりに活かしていくために、今、これを町の意志として進めなくてはなりません。 町民みなさんのご理解ご協力をあらためてお願い申し上げる次第であります。

(※天皇、皇后両陛下の礼文島利尻島訪問の件を話す)

大変長くなりましたが、私は、今年も、元気な礼文町をつくるため、職員ともども一生懸命努力してまいりますので、尚一層のご理解ご支援を賜りますよう、よろしく願いを申し上げます。

結びに、本日お集まりの皆様のみすますのご健勝と、今年一年が皆様にとりまして素晴らしい年でありますよう心からお祈り申し上げまして、年頭のご挨拶といたします。

“ご清聴ありがとうございました。”